

桃太郎が来た～制約を様式に昇華させる異界の力

近頃、岡山に行く機会が増え、地元の人達や自然と出会いから毎回新しい感覚や発想を得ている。中でも、ご当地ゆかりの桃太郎との出会いは新鮮だった。桃太郎が、わたしの中にやって来た、現れた、という感覚を得たからだ。

桃太郎が桃の実の中に入って、川を流れ下って来た昔話は、誰もが知っている。しかし、彼はいったい何処から来たのか、何者なのか、彼自身が謎であり、存在自体が問いである。彼は、川で洗濯をしていたお婆さんの日常に突然現れた。川の上流は深い森。西行が、「なにごとのおわしますかは知らねども かたじけなさに涙ながるる」と詠んだような神が棲む深い森かもしれない。桃太郎は、そのような異界からやって来た来訪者だ。

「桃太郎の誕生」を著した柳田国男は、桃太郎を異界から訪れた小さ子が後に偉業を成す物語のひとつとして、瓜子姫や一寸法師、さらには神の申し子が小蛇やタニシとして生まれ出する昔話や神話の系列に位置付け論じている。

それら異常に小さな子や常ならぬ出生をした子が、後々誰もが成し得なかった偉業を達成したり、或いは家に繁栄をもたらすといった話を創造し信じた昔の人達には、現代人とは異なる世界観、つまり、現代人が制約や障害や欠点として捉えるものとは異なる発想があったのではないか。

親指にも満たない小さな身体や蛇体として生まれてくることなど、現代人から見たら異常、あるいは異端、異形と呼ばれるマイナスの要素だ。それらは、現代人には克服されるべき打ち勝つべき、乗り越えるべき壁と捉えられてしまう。そのように考えれば、昔話の三年寝太郎などは不登校や引きこもり、鬱病などと診断されてしまい治療の対象にされ、後々の奇想天外な発想や成功譚は無くなってしまふかもしれない。

ところが、昔話の主人公は、決して自らの特異性を、制約や障害、或いは弱点や欠陥として捉え克服しようとはしていない。むしろ、それらを自分の生の様式へと昇華させているように思えるのだ。だから、主人公達は自分の特色を生かして既存のやり方とは異なる新たな文脈や場を創り生きることができ、周囲との新たな関係性を築くことで協働を実現し、不可能を可能にすること(イノベーション)ができたのではないか。

突き詰めれば、生きるということは、ひとりひとりが自分に与えられた制約を昇華することで、独自の生の様式を発明していくことかもしれない。制約を様式に昇華させ、潜在的な可能性に向けて扉を開いていく。それは、まさに芸術だ。

昔の山村の人々は自然環境や土地条件から様々な制約を受けて暮らしつつも、それらの制約を生活様式へと昇華させて山村独自の豊かな文化や生活の美を生み出してきた。そのような制約から様式への昇華は、里山の文化の中に息づいていたと思う。

しかし、現代はどうだろうか。制約を単に制約（障壁）としか受け止めない発想や、自然の制約を打破することで発展が可能になるという発想が一般化し、環境破壊を引き起こし文明の危機を招いているのではないか。だから、わたしたちは環境問題から心身の問題まで、技術革新で克服できると思い込んでしまう。人間の身体的な制約についても同じではないか。AI人工知能や人体のサイボーグ化を進めていく先には、果たして人間の真の豊かさや幸福があるのだろうか。そもそも幸福とはという問いを置き去りにしていないか。

現代文明の危機を乗り越えるために、私たちはどのように生きていけばいいのだろうか。私は制約を乗り越えるという発想から、新たな生の様式に昇華させるという発想への転換と、それを可能にするより深い知性や美意識が今こそ必要だと考えている。

先の戦争は昔話にも思想的な影響を与えた。それは、戦時中に描かれた桃太郎の姿にも表れている。当時描かれた桃太郎は、みな筋骨隆々としていて、とても子どもとは思えない姿をしている。当時桃太郎は、軍国少年のシンボルにされた。そういえば、大きな桃が川を流れてくるという描写も何かグロテスクな感じがしないか。

しかし、昔話の桃太郎はそうに大きくなかった。桃太郎の起源を探った柳田国男は、桃太郎話の源流には水の神の子としての小さいや小蛇が登場する神話があったと推測している。つまり、桃太郎も元々は小さき子だというのだ。その小さき子は、戦争の時代以前から時代と共に変化していったという。

昔話に変化を与えた要因として、柳田国男は、人々が森の中で焼畑を営んでいた山から広大な低地に降

り田畑の耕作をするようになったことによる経済的原因を指摘している。

そして今回、私はそのような経済的原因に、岡山県の山奥で出会うことができた。それは、柳田国男が言う水の神と人々との関係を一変させた経済的原因の現場だ。

鳥取県との県境近く、蒜山高原の麓の森の奥で、私はタタラ製鉄の跡に遭遇した。そこは、沢沿いの斜面から花崗岩が風化してできた真砂を削り取り、沢水を使って砂の中から砂鉄を選別した鉄穴流しの跡地であると地元の人から教えてもらった。中国山地では良質の砂鉄が採れることから、タタラ製鉄が盛んに行われた。その結果、砂鉄の選別で発生した大量の土砂が川を通して下流に運ばれ、水田の灌漑水路や瀬戸内海の浅瀬を埋めて陸地に変えていったという。

そう言えば、桃太郎の話には、鬼ヶ島に行くための舟が登場しない。しかも、島から宝物を荷車に乗せて帰っている。そうか、鬼ヶ島はその時すでにタタラ製鉄に伴う土砂流出により浅海が埋められ陸続きになっていたのではないかと、私の妄想は膨らむ。

また、昔はタタラ製鉄に必要な燃料を得るため大規模な森林伐採が行われた。だから、今でも中国山地の森林は表土が薄くどこか痩せた感じがする。当時の大規模な森林破壊によって、森に生息していた野生生物はもとより、森の中で小規模な焼畑等を行い持続可能な生活をしていた人々が重大な影響を受けたことは容易に想像できる。山は荒廃し、お爺さんは柴刈りをできなくなり、川は土砂で埋まり、お婆さんも洗濯ができなくなってしまったにちがいない。

桃太郎は、犬と猿と雉を連れて鬼退治に行く。犬を山犬つまり狼と考えれば、これらは皆んな森の住民。桃太郎は、森林破壊の被害者達と一緒に鬼ヶ島に向かったことになる。そして、それらの生き物達を仲間にするために桃太郎が用いたのがキビ団子だ。キビは焼畑で栽培される代表的な雑穀のひとつ。つまり、キビ団子は焼畑など山村の持続可能な暮らし(制約を様式に昇華した暮らし)、今風に云うなら里山文化への共感を象徴している。もちろん、これも私の勝手な想像だ。

このようにして、桃太郎は里山への共感を力に異種の壁を越え仲間を得て、上流で収奪的に生産された鉄が集積される下流に、つまり技術革新によって富の集中が起きている鬼ヶ島へと、富と力の象徴である鉄棒を持ち威嚇する鬼を退治しに行ったのではないか。

さて、鬼は何者なのか。

私は、今でもよく世間で「何々の鬼」と使われるように、鬼とは制約を打破し限界を超えるまでに自らの力の拡大を求めようとする者のことではないかと想像する。欲望の限界を知らない、欲望に支配され翻弄される存在。だから、鬼は悲しい。

鬼の様に資源を収奪し、力や富の増大を際限なく求め続ける、果てしない欲望に取り憑かれた者達を桃太郎は退治(人間に戻し)に行ったのだと想像したくなる。

最後に、桃太郎がそこから来た異界とは何かを考えてみたい。異界には、私達が生きている現実世界を相対化する力があるのではないか。別の世界もあり得る。この現実が全てではない。力には拠らない、異質で多様なもの同士の繋がりや創発による世界も可能だという示唆を、異界は私達に与えてくれるように思える。

その可能性を見失わないように、私たちには異界からの来訪者を受け入れ、異質な者同士の共存を実現するために、知性と感性を小さき子のように大切に育てていかなければならない。

格差の拡大、絶対的無理解の壁、排斥主義、ヘイトスピーチ、暴力の応酬といった分断線が、世界を覆い尽くしてしまう前に。

以上が、森の奥のタタラ場跡で桃太郎が来た！と感じたその時から、私の頭の中を小さき子が駆け巡りながら描いてくれた妄想である。

えっ妄想？いや妄想でいいのだ。物語は読み解かれたり解釈されるためにあるのではなく、世界の豊かさを取り戻すために人々を触発し突き動かし、潜在する世界の可能性(異界)に向けて知性や感性の扉を開くためにあるのだから。そのようにして、物語は人々を結び付ける。もちろん、清々しいフィクションとして。

桃太郎は生きている。彼が棲む異界は、今もこの世界に潜在している。だから、彼は私を動かした。

桃太郎は、私の中で、山と森と川と海を、そして人々を結ぶ幼い問いとなって、異界から流れ下って来たのかもしれない。

異形の小さき子として。

2017年1月1日

飯島 博

